

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

五木田 まきは

【所属】(助成決定時)

金沢大学大学院人間社会環境研究科

【研究題目】

マヤ文明遺産における持続可能な文化資源マネジメントの実践研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、マヤ文明遺産における文化資源マネジメント事例の提供、及び指針の提示を目的としている。マヤ文明遺産を抱える中米5カ国(メキシコ・グアテマラ・ベリーズ・ホンジュラス・エルサルバドル)では、住民が地域を理解し新たな価値を創造する文化資源学的研究は少なく、マヤ研究においては未だ途上段階にある。世界遺産「コパンのマヤ遺跡」を有するホンジュラス・コパルイナス市でも、遺跡に依存した観光業が中心となり、その限界も見え始めてきた。そこで本研究では、コパルイナス市において人々の記憶や継承されてきた日々の営みといったコミュニティ文化そのものにも焦点を当てることで、新たな文化資源を発掘する。さらに、博物館を拠点にして地域住民と共にそれらの文化資源を活用する活動を中心とした文化資源マネジメントを提案する。学術的・社会的に注目度の高いコパン遺跡とコパルイナス市を対象とすることで、将来的に他地域でも応用可能な地域社会におけるマヤ文明遺産の文化資源マネジメントの指針作成の一助とする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

コパルイナス市における文化資源を活用した活動調査を行った。ホンジュラス共和国コパン県コパルイナス市は世界遺産「コパンのマヤ遺跡」を有する人口約4万人の街である。コパン遺跡は年間約10~15万人の観光客が国内外から訪れる同国有数の観光地でもあり、遺跡訪問の拠点となる都市部は観光業が主要産業となっている。しかし、観光客の滞在日数の短さによる観光業の伸び悩みや、人口増加に伴う居住区域の拡大による遺跡へのダメージなど、文化遺産と地域発展のバランスが近年の課題となっている。本研究では、途上国における地域社会の持続的かつ内発的な発展に資するため、マヤ文明だけに依存しないコパルイナス市の文化資源を発掘し、博物館を中心としてそれらの文化資源を活用した活動の実践を行う。

本調査では、コパルイナス市の文化資源活用の一例として、研究拠点となるコパンデジタル博物館において、申請者と共に教材開発等を行ってきたスタッフが自発的に始めた展示解説という事象についての参与観察を実施した。まず、実際に行われている展示解説の実態調査としてトラッキング調査を行い、各展示室における解説内容、所要時間・来館者の属性ごとの解説内容・時間の差異の有無について記録した。また、展示解説に対する来館者の質問やその後の展示室内での過ごし方、来館者同士の会話といった言動についても観察を行った。さらに、博物館活動への参加による地域住民の意識変容を明らかにするため、既に入れ替わったものを含めた5名の歴代のスタッフに対して聞き取り調査を行った。項目としては、展示解説を行う動機、解説内容の習得方法、来館者の属性による対応の差異、博物館業務への関わる前の知識の有無及びその程度、展示解説などの博物館活動を通じて学んだことなどである。実際の展示解説の参与観察、スタッフへの聞き取りを元に、地域住民の博物館活動への参加による文化理解の促進効果や意識変容について考察を行った。

【結論・考察】（４００字程度）

コパンルイナス市の文化資源活用の一例として、研究拠点となるコパンデジタル博物館において、申請者と共に教材開発等を行ってきたスタッフが自発的に始めた展示解説という事象についての調査を実施した。この活動は博物館を管轄する国立人類学歴史学研究所からの指示ではなく、さらに対象地の他の博物館では行われていない当該館独自のものである。2015年の開館以降、5人のスタッフ入れ替えがあつたにも関わらず、前任者から後任者へと自然に引き継がれている。歴代のスタッフへの聞き取りの結果、彼らはその職に就くまで展示されているようなコミュニティの歴史を認識していなかったが、展示解説を通じて歴史や古代マヤ文明への理解が進み、自分の勤める博物館のみならず、コミュニティや遺跡により親近感や愛着を持つようになったことを明らかにした。当該地において博物館活動に地域住民が主体的にかかわることが、地域文化への理解促進と誇りの醸成に一定の効果がみられることを指摘し、今後の研究への指針の一つとした。